

第4回 邑南町小中学校の在り方検討委員会会議録(要旨)

1. 日 時 令和7年12月5日(金) 13:30~15:30
2. 場 所 田所公民館 会議室
3. 出席委員 松本委員長、山下委員、山中委員、武田委員、土田委員
4. 事務局 原課長、甲山補佐、松浦係長、野田

[開会]

1. 学びのまち総務課長あいさつ

事務局から配布物の説明

- ① 第3回検討委員会会議録
- ② 第1~3回目までの委員発言キーワード
- ③ 地区別・年代別に集計したアンケート結果 参考資料
- ④ 「邑南町小中学校の在り方検討委員会」における今後の方針・委員長提案(案)

2. 議題

(1) 第3回検討委員会までの振り返り

松本委員長：

- ・ 今回の資料のポイントになるのが、A3見開きの第1回から第3回までの小中学校の在り方検討委員会キーワードで、これは今日皆さんの意見やこれまでの振り返りをする中で重要になる。
- ・ 私の方で現状や再編、統合したらというところを少し読んでいく。まず一番大事なのが現状。児童生徒数が減少している、人口減少。部活の選択が少ない、習い事の送迎、距離が遠い、不登校が多くなっている。キーワードの1つに、学校再編について考えないと間に合わないというものもあった。
- ・ この委員会は再編ありきでは全くない。子どもたちの学びや、今後のキャリアのこと、何よりも子どもたちがこの町のことを本当に大事に思って盛り上げてくれること。それはこの町にとどまるか、外に出るかということもあるが、それよりも一個人として、人間として、よりよく成長して、この社会を動かす人になって欲しいという願い。それで我々の検討委員会が組織され、子どもにとってどうあるべきかを話し合うということだと思う。
- ・ 私たち一人一人の中にも再編はいい、いや再編はよくない、その2つの思いがおそらく重なって、ああでもないこうでもないといこれまでの3回の検討委員会で話していただいたと思う。
- ・ 我々限られたこの5名の中で進めていってもということで、町の人たちが一体どう思っているのかを、あくまでも参考資料としてアンケートをとらせていただいた。公民館活動の資料を集め、委員皆で眺めて、今までにこういう学びがあったということも振り返った。そういったこれまでの委員会のことなどをまとめたのがキーワードということになる。

(2) 諮問について

- ・ 本日第4回目で、委員長としての立場から、これまで委員の皆さんの意見等々を聞いて、この委員会の今後の方向性というものを『「邑南町小中学校の在り方検討委員会」における今後の方針・委員長提案(案)』としてお示ししたい。それについて修正するのか、いや全く駄目なのか、抜けてるところがあるから修正見直しするのかなど今後につなげていけたらと思っている。

松本委員長読み上げ

【「邑南町小中学校の在り方検討委員会」における今後の方針・委員長提案(案)】

松本委員長：

- ・ 提案を受けて皆さんの忌憚ない意見を今日はお聞きしたいと思っている。それをもってこれをどのように修正していくのかを決め、教育長への答申に向けて進めていきたい。
- ・ この提案(案)を作成する際強く思ったことは、子どもたち自身の成長が前提ではあるが、参考にした地域の人々の思いだった。第3回目の委員会の時に配られたアンケート結果のグラフにある現状のポイントは2つで、1つは、現状の教育について町の人たちは満足しているかということ。結果は概ね満足している。2つ目は、今後どうあるべきかというアンケートに対して、学校再編の話し合いを始めることが必要だと思う人は55%、やむを得ないと思う人は34%、この2つを合わせると町民の意見は89%が再編の話し合いが必要、もしくはやむを得ないと答えておられた。これは委員長提案の大きな決断になった。
- ・ この委員長提案を受けて、委員お一人お一人、様々な意見をお持ちだと思うので、発言いただきたい。

武田委員：

- ・ 私としては委員長提案(案)をベースに進められるのではないかとと思っている。先ほど松本委員長も言われた通り、町民自体も現状の教育はとてもすばらしいと思いつつも、これからの人口減少のフェーズでこのままではまずいというのは、我々保護者の間でもよく話題に上る。
- ・ 小中一貫であったり、公民館の活用といったことも検討しながら、柔軟にと思いつつ、さらに何かあるかと考えて思いつくとすれば、不登校になってしまう子など、少数の対応が必要な子どもたちについて、何らかの受け皿みたいなものができたらいいと思っている。
- ・ もう1つ私がずっと思っていることは、5年後、10年後、それから先のことを考えたときに、今のような教育のスタイルが世の中に残っているのかどうかということで、学校の在り方というのを少し未来志向で描く文言を入れたいと個人的には思っている。
- ・ 今回決めたことで今後ずっといくというよりは、これから変わっていく社会の中で柔軟に、どの子どもたちにも対応できるような学校の在り方が必要だろうと思っているが、あまり具体的ではない。ただ1度決めた学校の在り方というのが、5年後10年後固定化するというよりは、その時代その時代のベストを常にみんなで議論しながら、柔軟に対応していくような体制が必要なのかもしれないと思った。

松本委員長：

- ・ 武田委員は、保護者の視点から本当にしっかり考えていただいている。今の武田委員の意見の中で未来志向という言葉があったが、子供たちがもし教育の最終ステージとして大学に行くとは仮定すると、ここも大きく変わりつつある。これから先、島根大学、鳥取大学、広島大学というような枠組みもないかもしれない。だから固定化ということではなく、私たちが答申する中に今、武田委員が話されたような例えば3年なり5年なり、どこかで見直して、柔軟に変えられるような政策を盛り込んでいきたい。
- ・ おそらく何かを変えると、いいところもあるが悪いところも目立ってくる。これまでと違うので、それに対して地域の人で、教育委員会で、このたびの検討委員会の委員のような立場で また話し合っ て修正していくことは、盛り込んでいきたいと思っている。

土田委員：

- ・ 今、私は邑南町の教育支援員として勤務しており、1学期、2 学期とも全部の小中学校を回り、様子を見せてもらった。2 学期に回った時に改めて思ったのは、やはり少人数の学校の良さで、少人数だからこそやれるというところがたくさん見られた。アンケート結果を総合的に見ていくと、ある程度まとめないと難しいところはあると思っているが、やはり少人数の学校へ行くと良さを強く感じる。
- ・ 私はどうしても特別支援で配慮が必要な子どもたちに目がいくのだが、現場では「大人数の中では難しい」という言葉が上がってくる。難しいというだけではなく、もう少し細かく見て対応できればいいと思っていた。実際、私は不登校の子どもたちと関わっているので、もっと何かを変えていかなければいけないという子どもたちからの発信だろうと受けとめていて、学習等をどう確保するのかというのはあるが、今の形をとりながらでも、すぐに対応しなければいけないとすごく思っている。少人数の枠だからこそできているという部分を大事に、丁寧に対応できる邑南町の教育でありたいと思う。
- ・ フリースクールをもう何十年も前から取り組んでこられた方の講演を聞きに行った際、学力についての話があった。学力というのは何だろうと言ったときに出てきたワードが、「出会いをものにする力」だった。ただ計算ができるとか、何かを覚えてテストに答えることができるというのではないところに、しっかり力を入れていける考え方なのか、邑南町としてはここを大事にして子どもたちを育てているという核になるものをうまく出していけるような方向性がいいと思った。

松本委員長：

- ・ 土田委員が言われたことは非常に重要で、先ほど武田委員が教育は変わっていくと言われた。例えば島根大学も、人間性や学びに向かう姿勢を見る「へるん入試」といったものがある。有名な T 大学にも一切の試験なしで入ることができる学部ができた。
- ・ それは、計算するところは AI にやらせて、生身の人間ができることを大学が求めているということで、町としても小中高等学校としても、その線に従っていくというのは間違っていないので、その辺りを反映させたいと思っている。
- ・ やはり少人数の魅力というものはある。だが、今後児童、生徒がゼロになる可能性があったら手立てができないと思った。統合というところを提案しているが、不登校など一人一人に手立てをすることをどう実現するのかというのは、公民館なのか、フリ

一スクールなのかそれはわからないが、まだ少し時間があるので、答申の中に強く盛り込みたいと思う。

- ・ これまでの教育方針に対して町民はある程度満足してるので、何とかそれを残していきたい。ただ、ある学年がゼロになると対象とする子がいなくなる。それこそ消滅してしまったら、私たちの思いも消えてしまうというところが、痛し痒しだと思った。

山中委員：

- ・ 個人的には統合がいいか、残す方がいいかという、どちらかと言えば残した方がいい派だ。世の中少子化が進んで、児童生徒数が減ってきたということで、多くの自治体で統廃合が本当に加速している。他の自治体はすでにやっているから、子どもたちは統合した学校で伸び伸び、生き生きと小規模校のときより力をつけているのかという、これはまた比較してみないとわからない。
- ・ だが、今の学校の状態で、小規模校の子どもたちが、統廃合して同学年の子どもたちが多くなったことによって、コミュニケーション力がより付いて、学力が伸びるということに本当になるのかというのは、私は甚だ疑問だと思っている。
- ・ 小さな学校でも、学級の1学年の同級生が少なければ縦割りの集団学習で、あるいはコミュニケーション力が2人ではどうにもならないのであれば、他の学年との活動の中でどんどんコミュニケーションをとるような役回りをしたり、それでも足りないときは地域の方に協力してもらってコミュニケーションをとってみる。
- ・ この間テレビで、瀬戸内海の小さな島の1人しか1年生がいない学校で運動会をやると言って、その子が主人公になり、地域の方と一緒に協力している姿を見た。実際に町の地区民運動会と一緒にやるという時には、小学生の子どもも実行委員になって、どんな運動会にするかを大人と一緒に相談しながら役割を果たす。地域の人は地域の役割を分担の中で果たすみたいなのをやっている。
- ・ そういうところでも物怖じせずに地域の人たちと話したり、自分の言いたいことを伝えたり、自分の役割を演じたりすることは、とても立派なことで、それをつく力というのはとてもあると思う。それを甘やかすという意味ではなく、温かく、言葉をかけながら、教員と保護者と地域の人、みんなで1人の子どもを育てようということが出来る。実際やっているところもたくさんある。
- ・ そういうことを考えると、人数が少なくなったから統廃合もやむを得ないとか、したほうが子どもにはいいのかもしれないというのは、日本全国誰にアンケートしてもそう言うだろうと思うけれど、ただ本当に子どもたちにとっていいのはどちらだろうというのはなかなか一概には言えない難しさがある。
- ・ 仮に例えばいくつかの小さな小学校が統合して1つになったとすると、学校へは通学バスになる。自分の地域の学校に通っていた時の子どもたちは、家から学校まで歩いて通って、近所の方に「おはようございます」とか「行ってきます」とあいさつをして、「行ってらっしゃい」と声をかけてもらいながら、地域の道端に咲く季節の花をみんなで見たり、匂いを嗅いだりしながら学校に行く。ところが、通学バスに乗ってしまえば、地域にどんな人がいるか、どの季節にどんな花が咲いたり、どんな匂いがするのかはもうわからなくなってしまう。それでいいのかと思ったりする。
- ・ また、統合した学校だから、旧小学校区のことを気にしながら教育をしようと言っても、例えばふるさと教育で地域のことについて学ぼうとしたとき、旧小学校区それぞれのことを学ばせられるだろうか。時間的に難しいだろう。そうなると学校近くの地域の人たちが距離も近く、協力が得られやすいので、その地域について学ぼうとい

う学習になってしまうのは、ほぼ間違いないのではないか。そうするとその他の地域との学校の繋がりは、おのずと薄れていくことになる。関わりも少なくなるので、自分の地域の子どもに対する愛情みたいなものがやはり薄れていくのではないかということが心配される。

- ・ まずきっちりと邑南町の子どもたちがどんなふう to 育てたいか、そのために我々はどうやっていこうかというビジョンみたいなものがないと、なかなか簡単に統廃合はできないのではないかと気がしている。だから統廃合は、地域の皆さんの願いや覚悟をしっかりと語り、確認した上で進めていかないといけない。そうしないとだんだん子どもたちとの関わりも薄くなり、地域との関わりも薄くなり、近所の方々とコミュニケーションをとらなくなって、小規模校の方が良かったというようなことになってしまうのではないかと心配がある。
- ・ 委員長提案(案)に「対話的な学び」や「集団の中でのコミュニケーション力の育成」が極めて困難とあるが、極めては言い過ぎではないかと私は思っている。そのようなところをまず確認をしていかなければならない。
- ・ アンケートの回答に学校備品や設備の事があったが、それはどうなのかと個人的には思っている。統廃合してなくても、そこに子どもたちがいて学んでいるので、教育予算というのはきっちりつけなければいけない。統合したら少しは子どもたちの物的な学習環境もよくなるみたいな期待を持って、統合した方がいいというのは違うのではないか。そのようなところは反映されるべきではなく、議論の範ちゅうではないはずなので、本当に子どもたちにとって良いのはというところで考えるべきだろう。

松本委員長：

- ・ この委員会の中に多様な意見があるというのは、とてもいいことだと思っている。私の中にも山中委員のような考えがある。4つの小学校が1つになった出雲市の小学校でも山中委員が言われたような「地域って何だ」というので苦慮されているようだが、本当に4つの地区をそれぞれ回ったふるさと学習を推進しておられるので、やりようはあるのかと思ったりしている。
- ・ 日本全国には、児童が1人の小学校がいくつかあり、町全体でその子を育てるところがもちろんあるが、私の中の思いというのは、やはり同級生や上級生、下級生、少なくともそこに複数いて、集団というものを子どもたちのジェネレーションの中で作ればよかった。
- ・ 自分の中にもいろいろな葛藤が確かにあるというのが今のところの感想。

山下委員：

- ・ 邑南町に通い始めて40年、小中学校の授業研究にずっと携わってきたけれど、別に統合しなくても子どもたちは立派に育つと思っている。
邑南町の小中学校も小さいところは小さいなりに、中規模なところは中規模なりに、それぞれ大規模の学校と比べた時にも劣らない学力、人格水準を持っているのではないかとずっと思い続けている。一生懸命取り組んできて、私が松江から見ても恥じないすばらしい教育をしていると思っているので、現状を大切にしながら、できるところをつなげていけばいいのではないかと思う。

松本委員長：

- ・ 私も 15 年ぐらいだが、邑南町の小規模校、中規模校で育つ子どもたちの良さを見てきた。本当にそういう意味では、山下委員と思いをいつにする部分は大きい。
- ・ 現状が現状でなくなる未来が来ていること、統合の話をするのが一番最後ぐらいだという話等々思うと、委員長としての立場で言えば、私たちの委員会は重いなど思っている。
- ・ 5 年後 10 年後に子どもたちがいなくなる、そういう未来がもうそこまで来ているという切実感は共有したい。

- ・ 次に地区ごと年代ごとのアンケート結果の資料があるので、何か差異があるのか、これまでの意見の中に新たな視点や考えが見えてくるのかどうかをお話いただけたらと思う。

武田委員：

- ・ アンケート結果を見て、注目すべきは少数データのところかと思っている。特に統廃合が必要ない、現状のまま進めて欲しいという意見の理由というのは注目しなければいけないと思って見ていた。
- ・ 町民向けのアンケートで、『学校再編の話し合いを始めることについて、あなたのお考えに近いものを選んでください』という問いに、『必要ない』と答えた方の人数と地区を見て、次の問いに『現状の学校はそのまま維持し、工夫・連携して教育活動を進める』と答えた方の人数を見比べたときに印象的だったのが、30 代以下はおそらく同じ地区で同じぐらいの人数が必要ないと答えているように見えるが、50 代以上のところに人数差があった。
- ・ ここからは想像なのでわからないが、多分このまま維持して欲しいと思っているけれど、話し合いはしなければいけないと思っている人たちが、50 代ぐらいの方に結構おられるのではないかと。おそらくそういった方の中には何かしらの懸案点があるのだと思う。不安だったり、何かまずいことが起きるのではないかとこのようにあるような気がしていて、そこに向き合って答えていく作業というのは必要なのではと思った。
- ・ 先ほど山中委員が話された内容を諮問にもぜひ入れるべきではと思って聞いていた。例えば統合をすとしたときに起こる懸案点やリスク等はある程度予測されると思うので、それを解消するためには、間違いなく地域の協力が必要だと思う。
- ・ 今の邑南町の子どもたちは、素朴で素直でやさしい子が多いと私は思っていて、それはやはり大人たちがやさしいからだと思う。地域の人が優しく声をかけてくれて、何かあったら叱ったり褒めたり、みんながしてくれる町がもし失われるとなったら本当に良くない統合の形になる。それをおそらくこの 50 代の方たちはわかっておられるのではないかと。例えば統合したとしても、どういうやり方をしたら子どもたちと地域の大人との繋がりをもっと持てるのかという意見をお持ちだと思う。
- ・ こういった方たちの意見を収集して、子どもたちを育てようとしてくれる大人たちの力をどうやって今後も引き継いでいくのかというのは、ぜひ強く言いたいと思った。

松本委員長：

- ・ 私も今の竹田委員の意見に賛成というか、絶対そうあるべきだと思っている。

- ・ 私が1つ思ったのは、保護者と町民にとってアンケートの結果に従って、私たちはしっかりとその意見に耳を傾け、最善な道を目指しているんだということで、懸念点も懸念の逆の効果的な面も含めて情報を公開し、地域住民と一体になって進めていかなければならないということだ。
- ・ また、この委員会で「統合」と言っても、いつにするということは言っていない。方向を決めて次に示す。私たちは3月末までが任期ということなので、そういうところをご理解いただきたいと思っている。

土田委員：

- ・ 保護者向けのアンケート結果を校区ごとに分けたものを見ると、「現在の学校の児童・生徒数や規模について、どのように感じていますか」の問いに、「ちょうどいい」と答えた方が結構おられると感じた。「小さい」と答えた方もいるが、特に矢上小学校校区は「ちょうどいい」が多くなっていて、小規模校についても、「ちょうどいい」と考えておられるところも結構あるのだと改めて思った。そもそも非常に人数が多いところなのに、回答数が少ないというのが気になって、このままで100%とは言えないところがあると思った。
- ・ 松本委員長の発言で、地域住民の話を聞かなければいけないというところで思ったのが、先程話したフリースクールに取り組んできた方の講演で言われたのが、フリースクールを立ち上げるときに子どもたちの意見をすごく取り入れたということだった。
- ・ 子ども権利条約が出た関係で、学校現場も子どもたちの意見を取り入れて、学校のルールを見直したり、子どもたちがどう思っているのかということを取り上げたりして、それについても言える子どもたちを育てていこうという方向性がある。
- ・ 少し難しいところがあるかもしれないけれど、子どもたちがどう思っているのかということとはとても大事で、話を聞いてみることも必要ではないかと思ったところだった。

松本委員長：

- ・ 本当にそのとおりだと感じている。

山中委員：

- ・ 私は社会教育行政に携わった期間が長かったので、子どもたちのためにということを中心に据えながら、地域の方がどういうふうにも思っておられるのかということが非常に気になっている。
- ・ 邑南町はこれまでも社会教育がとても盛んなところで、公民館を存続させていることと、公民館の職員は町の職員で、まず住民の皆さんとフェイストゥフェイスで向き合っていて、生活や暮らしの中のいろいろな課題であったり、豊かな暮らしのために関わりを持って行政に反映させているということが非常に特徴がある公民館で、島根県の中では邑南町にしかそういう公民館はない。
- ・ 子どもたちから高齢者まで、住民の皆さんの学びの機会を提供しているわけなので、社会教育が盛んだということは、イコール住民の皆さんが、学んだことを暮らしの中で生かしていく、学んだ成果を生かしていく、つまり、邑南町の皆さんは非常にそういった意識の高い住民の集合体であるということがいえるのではないかと思います。
- ・ 一方で、このままだと邑南町の存続すら危ういのではないかとというぐらい少子化が進んで、子どもたちがいなくなってしまうという危機的状況がある中で、住民の皆さん

んの意識の高さで、邑南町の将来の隣人になる子どもたちを何とか地域のみんなで育てていこう、そして邑南町の空気に触れ、物に触れ、住んでいる人間にも触れさせて、愛着と誇りを持ってもらおう。将来的には邑南町に帰ってきてもらおう。そのためにふるさと教育を中心に町を挙げて取り組んできたという経緯があると思っている。

- ・アンケートの回答の中で、子どもが減れば統廃合もやむなしといった意見や、ぜひ必要という1歩進んだ意見もある。また、今のままでいいという意見や学校が遠くなると困るといった意見もあって、そういう住民の皆さんがいるのも、やはり邑南町ならではの気がしながら資料を見ていた。
- ・今後、もしやむを得ない中で統廃合が進んだときに、学校が近くななくなった地域の方が、これまでの取り組みや子どもたちの思いというものを引きついで統合した学校にも、子どもたちにも継続して取り組んでいけるのか、遠くなったことをきっかけに子どもたちから離れてしまうのか、どっちに転ぶかということが非常に大事になってくるのではないかと考えていた。

松本委員長：

- ・山中委員の意見を聞くにつれ、そのとおりだと私も思っている。
- ・前回、フィンランドとドイツに行ってきた話をした。フィンランドは、国土の70%以上が森林と湖で、島根県もそれに匹敵するような自然環境がある。フィンランドは世界一幸せな国だという住民の意識もある。
- ・この間NHKの番組を見ていたら、フィンランドは100歳以上の人口比率が高いと言っていた。100歳を超えたおばあちゃんが、セルフレジで会計しておられ、本当に生き生きとこの町を誇りに思っている姿を見て感動した。フィンランドと全く同じで、日本の中で一番幸せな県は島根県じゃないかとフィンランドを見てきて思った。そうしたときに私の中では本当に身近にいる人や自然、これは損なわないようにと強く思っている。
- ・答申の中にダイレクトには書けないが、しっかりと伝わるような文章で皆さんと一緒に書きたいと思っている。

山下委員：

- ・私も約40年近く邑南町に関わってきたので、学校を大切にしたいという思いは、おそらく委員の中で一番強いかもしれない。どの学校も授業研究に一生懸命取り組んできた。そのもとで、邑南町の児童生徒の皆さんが一生懸命学んできている。
- ・私が見たときに、大規模な小・中学校の児童生徒と比べても遜色はないというふうに思う。それはひとえに学校を温かく見守る地域の体制、地域の皆さんの支えがあったということではないだろうか。
- ・とりわけ口羽小学校には、授業研究にもう100回近く行ったのではないかと。その子どもたちの様子を見てみると、非常に学力的にも豊かで、地域に支えられ、地域に残ったら期待にこたえられるように一生懸命頑張っている。伝統的に地域が児童生徒を育てているという歴史的な経過がずっとあるのだろう。
- ・何か邑南町を持っている特性、良さというのか、町民の皆さんにも見えないこの良さが、たくさんあるのではないだろうか。それをこの委員会でもっと発見して、発出していく、我々にも責任があるのではないかという思いを強くしている。

松本委員長：

- ・先ほど土田委員が言われたように、保護者向けのアンケート問 10 で規模感を聞いたところ、どの地域も「小さい」と答えた人は多いが、「ちょうどいい」と答えている人も多い。この「ちょうどいい」というのは、やはり現状の教育に「ある程度満足」、「非常に満足」ということが多い。だからこの部分は損なわないように、しっかりと大切にしなければいけないということは間違いない。
- ・一方で問 11 の学校再編の話し合いを始めることについて、「必要だと思う」、「やむを得ないと思う」を合わせると 89% で約 9 割の人が、早く始めてくれと言っているのでこの委員会が今存在し、そういう意味では、私たちの委員会の存在意義というのはこれだけでもあると思う。
- ・何ヶ月か悩んで今日の案を出したのだが、住民の意見が十分に反映されていないという声を払拭したいという思いがふつふつと出てきたというのは実際あるが、住民の方が学校再編の話し合いは必要だと 9 割が思っているとなって、やはり重いと感じた。
- ・再編の話始めて、どこがどこだとか、いくつにという議論はここではしないので、その先にどういう道が待っているのか、教育長に答申したいのは現状のままでいくのか、統合の道なのか。その先に、それぞれ細かな道が待っているのかというふうに思ったりする。
- ・では再度、順に意見を伺いたい。委員長提案(案)に書かせてもらったとおり、子どもたちがいなくなるということが、もう現実にある。全員がいなくなるということではなく、ある学年が丸ごとなくなる。それを考えるとこれは待たないということも思った。
- ・もう一度、私の案を見て、ここに付け加えたいこと、いや、やはり再編ではなくてということであれば、その意見も合わせて話していただきたい。教育長にはまず、再編についてイエスかノーかを伝えて、その下にこういう道が子どもたちにとって最善だと思ったのでこうなったということ、私の提案(案)を修正する形で作成していきたいと思っている。

武田委員：

- ・松本委員長の話を聞いていて、細かいテクニカルな話ではなく、もっと大枠の子どもたちに対して思う、何か願いのものでもいいのかと思い、改めて考えた。親として子どもにどう過ごして欲しいかと思うと、やはり生き生きと元気に過ごしてくれればそれでいいと思う。それは、再編しようがしまいが、正直保護者としてはどちらでもいい。子どもが楽しく元気に育ってくれればよくて、そこで子どもや保護者は多分、勉強とかそんなに思わない気がしていて、楽しく過ごしてくれれば勉強ができようができまいが、ある程度頑張ってくれればいいと思う人の方が多いと思うし、私もそう思う。
- ・再編して、学校のあり方としてこうなったら嫌だと思うのが、これ以上子どもたちが忙しくなることというのはある。
- ・今すでに小学校も中学校も大変忙しく、例えば地域の行事をやるとか、放課後地域で集まるとか、余白の時間が子どもたちに本当になく状態になっているように感じている。これは何かというとやはり学力を上げなければいけないとか、スポーツな

- り、習い事なりをどんどんやらせて、数値的に能力を高めたほうが幸せだろうという社会の流れだと思うのだが、これはあまり正解ではないような気がしている。
- ・ 去年、フィンランドの高校生のホームステイを受け入れて衝撃的だったのが、フィンランドでは、午前中で学校が終わるらしい。午後からも好きに生活していると言っていた。去年来ていた子は高校3年生で、大変優秀な子だったが、来年大学はどうするのかとメールで聞いてみると、「行かない」と返ってきた。1年ちょっとのんびり過ごして、その後ゆっくり考えると返信が来た。
 - ・ こののんびり感をぜひ邑南町でできたら、子どもたちはとても幸せだと思う。だから学校のあり方として、子どもたちに何かやれと急かすのではなく、ゆったりと過ごしながら自分の得意なことや、好きなことを伸ばしてくれれば、5教科全部得意にならなくてもいいような気がする。
 - ・ 勉強だけ、運動だけじゃなく、何でもいい、子どもたちが幸せに暮らしてくれるのだったら、あり方として一番望ましいと親としては思っていて、いろいろな細かい議論を抜きにして、何を答申で伝えたいかということ、幸せに生きていって欲しいということも思った。

松本委員長：

- ・ フィンランドの話が出たので話すと、子どもたちだけじゃなく、大人も16時以降は働かない。老後のためにお金を貯めていない。社会保障がしっかりしているので、貯金ゼロでも老後を生きていける。日本は真似できないが、参照すべきところはたくさんある。
- ・ 子どもたちはそういう大人の背中を見て育っているんだなとフィンランドで見て思った。だから、大人と触れ合う機会があるこれまでの教育のあり方というのは、減じて欲しくない。これは答申の中に強く落とし込みたいと思っている。

土田委員：

- ・ 子どもたちが生き生きしているためには、やはり大人が生き生きしていることがとても大事だと思っている。私が相談を受けるといろいろ苦しんでおられる家庭、ハンディを抱えながら生活されている家庭がある。
- ・ 邑南町はとてもいいということばかり強調してもどうなんだろうと思う。邑南町には、田舎の良さがあるが、その裏返しで田舎のしんどさもあって、大人が生き生きさせているのかどうか、実際にはいろいろなことがある。
- ・ しんどい中でも子どもたちが本当によく学校に来ていると思うようなことがあったり、やはり行きにくくなっているというようなこともある。不登校と一言で言ってもいろいろな背景があって、対応もいろいろになる。
- ・ 対応していると、全体的に考えたらこんなことはいいじゃないかを感じることも、その裏側ではやはりしんどくなることもある。大規模なところだったら流されてしまうことも、邑南町の規模だからこそ、もう少しどうにかできないか、もう少し支えてあげられたらそんなことにならなかったのではないかということ、関わりが強いからこそ余計に思うことがある。
- ・ いいところをとっていったらたくさんあるけれど、その反面難しいところもやはり見つめていかなければいけないというのは、今までの話の流れの中で思っていた。
- ・ 他の町の行政に関わってる方と話したら、邑南町の方は、大人が自分からこういうことがやりたいと言って、行政などに働きかけて来る人が多く、個人的に何かやり始

めるといふ芽が出やすい気質があると言っていた。町外から来る人を割と受け入れやすいところもあって、みんなで何かやってみよう、面白がって何かに向かってみようといった雰囲気や姿が、子どもたちの意欲にも伝わっていくといい。

- ・子どもたちに生き生きとしてもらうために、いろいろな学び方ができる、そういった場をちゃんと設置してあげたいと思う。これでもいいという感じで対応できる場を整えてあげるといいのではないか。そして意識も社会的にも、ここは何でも受け入れてもらえるんだという雰囲気を作ってもいいのではないかと思っている。

松本委員長：

- ・いいところと悪いところ、全部含めて邑南町のありのまま。嫌なところを見せないのではなく、いいところと悪いところに子どもたちが向き合っただけでなく、こっちを良くしたらこっちが落ち込んだりいろいろすると思うが、バランスを取ってありのままを見せていけばいいのではないかと思った。
- ・あとは学びの場。これは再編したら駄目ではなく、これまでの学校というところだけではなく、提案(案)に公民館と書かせてもらったが、それ以外にフリースクールなどで、例えば不登校になる子どもたちにどう対応していくか。「誰一人取り残さない」というSDGsの理念にもあるように、そういうこともしっかりと答申には盛り込んでいきたい。

山中委員：

- ・アンケート結果で、現状でいいという部分と、肯定的な意見はどこなのかと見ていると、若干学校の特色があるのかもしれないという感じがしていた。
- ・児童数が違うということであったり、先生方の中にも積極的に地域の人や公民館とつながろうとする先生とあまりしない先生、そういう差があって地域の方や子どもたちが関わる頻度が変わってくるだろうし、どこまで入ってもらうかということも変わってくるような気がする。
- ・積極的に関わって開かれた教育課程、教育活動を行うということからすれば、コミュニティ・スクールのようなことを導入して、学校の協議会でどんどん地域の人に入ってもらって、一緒に子どもたちを育てる、学校の外も中もないぐらいのつもりで関わってもらえるような取り組みをすることも大事かもしれないという気もしていた。
- ・コミュニティ・スクールや今のふるさと教育もそうだが、市町村会議を必ず持つようにと県の教育委員会は条件をつけているはず。市町村ごとに、地域や学校の保護者、みんなでどんな子に育てようか、どんなふうに育てたいかという願いを十分に議論する。それから、例えばこれは主に学校教育活動でやろう、このことは学校も教育課程が忙しいから公民館や地域で担ってほしい、これは家庭の問題だとか、学校が中心ではあるけれど、もちろん保護者や地域も手伝うという役割分担をしながらも協働することは協働していく。それがやってみてどうだったかと評価や振り返りをしながら、また次年度に繰り返しやっていく。それは島根独自のふるさと教育の推進という部分でやっているはずだ。
- ・コミュニティ・スクールの考え方も共通する部分だと思う。だからこんな子どもたちに育てられるといいということを十分に議論をする。そしてある一定の目指すものをつくり上げる作業が絶対必要だと思う。それは現状でも、再編をやむなくするのであっても、尚更それがないと絶対上手いかなんかと思っている。

- ・学校の教育内容はもちろん国が定めて、全国同じように学習指導要領があって教育課程編成するわけだが、それにプラスしてそれぞれの学校が立地している地域の人の願い、保護者の願いもあって〇〇小学校の教育というものができるところなので、そこをしっかりと議論して作ることが大事。
- ・誰が、いつみたいな計画にまで落とし込んでいく。落とし込んで終わるのではなく、結果がどうだったか、目指す子どもたちの姿に近づいているかなど、評価をきちっとこまめにするような営みが絶対必要だと思う。そういうことをやっていけば、さらに同じような子どもたちは温かく関わってもらいながら、健やかな成長をしてくれるのではないかと思った。

松本委員長：

- ・これが良かったのか悪かったのか、常に評価をして取り入れていく。このことは確実に答申の中に入れたいと思う。
- ・私たちの委員会がこう結論を出したと答申する、いろいろなパターンが考えられるが、議事録に残っている私たちの言葉1つ1つ、後から振り返ったときにしっかりと議論したというその足跡だけはしっかりと残していきたいと思う。
- ・賛成反対と単純に言いたくはないが、それぞれの委員の中にも賛成と反対、ある程度持っておられると思うけれど、先ほどの評価をすとか、ある方向性を決めたとその方向性は常に見直していくとか、そういうことを盛り込んでいけたらと思っている。

山下委員：

- ・ずっと小中学校を訪問し、授業参観してきたが、校長室や全体会議等でこの再編問題は話に出たことがないと思う。私の中では再編の必要性はないのではと思っている。
- ・何か課題や問題があれば、校長や先生たちを通して言ってもらおうと、私自身もいろいろな取り組みができるのではと思ってきたけれど、この40年来、何か学校の問題や学校の再編など、いろいろなことについて危惧を持っている地域の人と出会ったことがないので、私はもう現状のままでいいのではないかという思いしかない。

松本委員長：

- ・私が地域でいろいろな人と会って聞いた言葉と、今アンケートの回答で出てきている割合、アンケートをどういう人にどういうものを取ったかというのはもちろんあるが、それにしても委員会で調査したこの意見というのは、保護者や地域の声だと思う。
- ・答申に向けて進めていかななくてはいけないと思い、委員長提案(案)を出して1から5で示したが、1の「今後の児童・生徒への質の高い教育の実現に向けた教育政策として、小・中学校の統合を提案する。」については、今日、委員の皆さんの意見を聞いて、もちろん反対、現状のままということもしっかり受けとめた。それも答申の中にはしっかりと書き込めたらいいと思いつつ、全体としてはこの1でいきたいと思っている。
- ・2番、「異学年間の交流や中学校への進学への折の『中一ギャップ』などを考慮すると小中一貫教育である『義務教育学校』も視野に入れると良い。」とした。

- ・私たちが統合と言っても、町長がNOと言えそうではないので、その先は結局できないが、2番に書き込んだのが、小学校と中学校を一貫にという小中一貫教育で、6年と3年をつなげた9年の中でとらえていったらどうかということを提案しているが、より具体的になってしまい申し訳ない。
- ・この一貫というところについては、どうだろうか。中一ギャップだとか、これは土田委員に聞くといいかもしれないが、中学生になった途端に不登校になったりするのは松江、出雲も結構な数あって、大阪、東京ではものすごくある。町の状況を見たときに、やはりそのギャップがないようにということで、小中一貫という道もありではないかと提案しているが、これについて意見をいただけたらと思う。

武田委員：

- ・よくわからないところが正直なところだが、中一ギャップで苦しんでいる子に私も出会ったことがあるので、気になることがなくはない。ただ多くの子は小学校、中学校とほぼ同じメンバーで移動していくことを子どもたちもわかっているの、そんなに大きくギャップを感じる子が多数派ではない気はする。
- ・ただ、視野に入れると良いという表現をしておられるので、コミュニティ・スクールも含めてだが、いろいろな概念や新しくこういう考え方があるというものを提案しておくことはいいのではないかと思った。
- ・一方で提案(案)の1から5のこの順番の中であり方を主張するというのがメインテーマであるのであれば、学校の形態や手法等の前に、大切にしようというものを先に上げたいと思った。

松本委員長：

- ・おそらく私のこの前文で書かせてもらった言葉をとればよいと思う。今言われたコミュニティ・スクールの例もあったように、視野に入れるとよいという表現でいくつかの形態を示す。

土田委員：

- ・私もあまり細かく把握しきれていないけれど、中1になったことで不登校になるというよりは、やはり難しさを小学校の頃から持っておられて、不登校になっていくというケースだと思う。
- ・そのお子さんのいろいろな思いや特質があって、だんだん苦しくなっていくという感じがある。
- ・私が思うのは、小中一貫教育となると、小中が同じ校舎という感じのイメージ。

松本委員長：

- ・小中一貫教育には別々の校舎でというのもある。いろいろなパターンがあって、小学校のときに慣れ親しんだ先生が中学校に教えに来てくれるなど、そういうメリットもあったりする。
- ・島根県には八束学園があり、八束学園は校舎が1つ。小中一貫教育の形は定まっていない。

土田委員：

- ・八束学園を実際見に行ったことがなく、その規模感がわからないけれど、規模が大きくなると、その分なにか難しさも出てくるような気がする。先生たちの業務が軽

減されるといいが、余計に何か細々煩わしくなってくるのは良くないととも思う。もうそういうものだと流れ始めてしまえば大丈夫かもしれないけれど。

- ・形としては今のままだでも、どう連携していくかというところがすごく大事だと思っている。この前、瑞穂地域の小学生たちが、中学校に入る前に高原小学校に集まって関係づくりをするワークをして、次の週に瑞穂中学校に行つて英語と一緒に勉強するといったことをされていた。大人数の同年代と関わるというのはとても大事だと思うので、小規模校の子どもたちも日常的に関わつて、何かを練っていくような人間関係の繋がりを作れるように、ちゃんと年間計画の中にも入れて、何かもう1歩突っ込んだ形になればいいと思っている。
- ・「建物を一緒にします」、「カリキュラムはこうなります」という前の段階で何かやっつてからいかないと、絶対しんどいだろうと思う。人間関係を練っていけるものだったら、新しい校舎を作るという感じにならなくても、何か工夫によって繋がりを持てるやり方がないかと思っている。そのためには、早め早めに予定などを組んでいかないと動けないので、その辺りを誰がどう推進していくのかというのは気になる。私はすべて一連にすればいいということでもないと思っている。
- ・それと一番の対話的な学び、集団の中でのコミュニケーション育成が極めて困難な状況にあるのを前面に出すというのは、教員の力量というか授業をどう進めていかや、ICTを入れていく、オンラインで交流する、実際にみんなで集まってやるとか、いろいろな工夫をしていくことがあると思うけれど、ただこれができなくなったからというのを前面に出すのはちょっと違うという気がしている。

松本委員長：

- ・一貫というのは、例えば小学校の6年生と3年生が異学年交流する「兄弟学級」ということがあったとすると、9年間の中である学年がいなくなつても繋がれるという思いだった。カリキュラム自体は小学校と中学校、教育課程があるのでそれは変わらないと思う。
- ・今、小学校と中学校が分断されているので、今ここで議論しているのがおそらく分断されていることを解消するという1つの提案として、コミュニティ・スクールだとか、一貫教育も視野に入れるという思いだった。

山中委員：

- ・私ごとだが、退職する前最後の4年間、県の教育委員会から故郷隠岐の学校現場へ帰つた。帰つて1年目の夏に学校を引っ越しするということを引き継いだ。建て替えて、島の中にあつた3つの小学校を1つにして、同じ校舎の中に小学校と中学校を入れるという引っ越しだった。
- ・当初は、同じ校舎で島に1つだけの小学校、1つだけの中学校になつたが、小中一貫ではなかつた。すぐ教育長のところへ行つて、同じ校舎で小中一貫の環境がしっかりそろつている。子どもたちの9年間を見据えた教育をやるのに絶好の環境ではないか。一貫教育をやらない手はないと随分と提案した。
- ・勤務3年目に2年後一貫校にするということになって、それから職員の研修や、今できることということで、運動会は小中合同でやるといったことを、生徒会の子どもたちとずいぶん熟議した。
- ・一貫校にすることは、一緒に校舎という環境があるから、とてもやりやすいパターンだった。別々だと重複することがある学習も、小学校ではこんなことを重点的にや

て、中学校に入ったらさらにその延長線でこんなことをするといった一本筋を通すことで、小学校の教員と中学校の教員が相談しながら実践していくことができる。もちろん一緒にすることもできる。中学校の教員の専門性を可能な範囲で小学校の教育に生かすこともできるような、大まかに言うと小中一貫とはそういうもの。

- ・だから邑南町の子どもたちの9年間を見越して、こんな子どもに育てようみたいなことを共有して、そのためには小学校1年生ではこんなことができるように、中学校1年生ではこんなことができるようにと考えていく。
- ・あるいは「あんなお兄さんのようになりたい」という憧れみたいなものを持てるような機会を作ってあげるようなことをすると、中一ギャップもなくなってスーッと上がっていきけるんじゃないかというのが、正直なイメージ。
- ・もちろん別々の校舎でやっているところもある。やっているけれど、そういうメリットは若干減ると思っている。
- ・私は長く東京三鷹のコミュニティ・スクールと小中一貫校に関わって通ったけれど、そこはそれぞれの校舎が違っていった。小学校の研究発表で行ったときに、中学校の生徒が小学校の校門で挨拶運動をやっている、中学生が小学生に「おはようございます」と声をかけていた。ちょっとお兄さんになったような気持ちで、自分も下級生に声をかけようというようなことがあるかもしれない。校舎が違っていてもやりようで、いくらでも小中一貫はできるのではないかと考えていて、今の邑南町の学校でもやろうと思えばいくらでもできることだと私は思う。

山下委員：

- ・教育には、知識と技能の教育「陶冶」と意識と行動の教育「訓育」がある。小学校と中学校が連携することによって、その陶冶の面での効果が非常に大きいのか、訓育の面での効果が大きいのか、このあたりはよく検証しながら見てみると、ただ「陶冶」の知識と技能の教育の面ばかり重視していくと、子どもたちの学びに対する意識や動きがギクシャクしてしまうようなことがありうるのかもしれないので、どちらの面でも統一しながら上手くクリアしていけるような学校の連携のあり方というものが大切なのではないか。
- ・その点では、小学校と中学校が一緒であった方がいいのか、離れた方がいいのか、それぞれのメリットがあったんだろうが、児童生徒数が少なくなっていく1つの学年の教育学習上の効果が、どう見ても不十分になっていくような状況が非常に大きくなるようなところでは、思い切って一緒になっていく必要があるのかもしれない。しかし、まだまだ子どもや学校、地域の大人たちとの協働の中で、きちっとカバーできる見通しがあれば、そんな苦勞することなく、そちらの方がいいのかもしれない。
- ・児童生徒数の限界がやはりあるのではないか。その限界に向き合うときに、邑南町には来ているのかもしれない。やはり1人1人の児童生徒の知識と技能の教育の面を向上させ、意識と行動の面の裾野を広げるために何がベストなのか。
- ・授業研究で児童の少ない学年に行くと、子どもたちも一生懸命、自分の考えられる限りのいろいろな応答を繋ぎあうけれども、おのずと限界がある。その辺りは、教師の指導力と、評価力というのか、助言力でカバーするということもあるけれども、やはり基本は、児童同士が切磋琢磨しながら学び合って作り上げていくこと。授業時間や休み時間で交流する中で作り上げていかなければいけないところが、何か足りないと思えたところでは思い切ってやらなければいけないのではないかと、その時はもう来ているのかもしれないと思っていた。

松本委員長：

- ・この委員会はあと2回で、最終回はおさらいをして答申を教育長に渡すことを考えている。私からもう一度確認したいのは、(案)の基本線は示したものだが、1の提案の統合というところがどのような形になるのかは、町長、教育長、議会に委ねたい。2については、義務教育学校だけではなく、小中一貫や、コミュニティ・スクールなど、幅広い学びの場というところで提案していく。
- ・今日は委員長提案(案)だったが、次の第5回目は委員会提案(案)ということで示したいと思っている。今回は簡単に書いたが、委員それぞれの思いが詰まった答申に持っていきたい。
- ・今日の委員会でもわかった、私たち委員の中にも様々な意見が存在しているという中で、委員長の提案(案)だが、そろそろ統合の時期に来てるんじゃないかという意見もあって、基本、提案(案)の1の統合というところで、2以降は、委員の皆さんの意見をいただいて少し文言を修正して、委員会提案(案)ということで5回目を迎えたいと思っている。
- ・私たちは、町のことはしっかりとベースに置きつつ、子どもたちの未来と学びのことをしっかりと考えていることが、今日の議論の中でもおわかりいただけたと思う。会議録が一般公開されて、町の人にも、私たちの苦しみ、悩み、子どもたちに対する期待などが伝わればいいと思っている。

【閉会】